

# 混填と蘇物

——扶南国家形成の再検討——

深見純生\*

## はじめに

東南アジアにおける初期国家形成について、文献によって明らかになる最初期の具体例は林邑と扶南である。ともに漢字名であることが示すように、漢籍から明らかになるものである。このうち林邑は中国とのかかわりの中から国家形成をなしとげたことが知られている。それは中国が林邑という国家を植えつけたという意味ではなく、中国の進出に対する服従と背反の繰り返しのなかから生れてきた現地の勢力が国家形成をなしとげたのである。2世紀のことであった [山形 2001]。

他方の扶南については、「インド化」による国家形成という考え方がかなり広くおこなわれてきた。それは漢籍に記される扶南建国説話の主人公混填をインド出身のバラモンとみなし、その名はサンスクリット名カウディンヤ Kaundinya の音訳とする解釈によるものである（たとえばセデス 1980: 69; 石澤 1998: 98）。これがひいては東南アジアの「インド化」論すなわち（紀元1～2世紀頃に）インドの直接的な影響によって東南アジアの初期国家が成立したとすることの主要な根拠の一つになってきた。実は

---

\* 本学国際教養学部

キーワード：Funan 扶南, Hundian 混填, Suwu 蘇物, Indianization インド化, state formation 国家形成

のちに取り上げるように混填をインド出身とする解釈に対して異説もすでに提起されている。本稿ではまず混填をインド出身とする説の当否を再検討してみたい。

史料となる漢籍は、3世紀はじめ、三国時代の呉の交州刺史呂岱が康泰と朱応の二人を扶南に派遣し、彼らが見聞を記録に残したものである。それらは逸書となったが、その一部が『太平御覧』など他の書物に引用されて我々に伝わっている。これらの漢籍における混填や柳葉などの文字の異同等に関する検討は杉本の論文で尽くされているので、これに依拠することにする [杉本 1956: 308-416]。

## 1. 混填はインド出身か

扶南建国説話は康泰『呉時外国伝』（『太平御覧』巻347所引）および正史の『南齊書』『梁書』『晋書』の扶南伝に見られる（史料1～4）。このほか、『南史』にもみえるが、『梁書』をなぞっただけなので除外する。また『新唐書』にも扶南伝があるが、建国説話はのっていない。

『南齊書』『梁書』『晋書』は王朝の順に従うなら『晋書』『南齊書』『梁書』と並べるべきだが、成立年代順には『南齊書』『梁書』『晋書』となる。もちろん『呉時外国伝』が一番古いのであるが逸書であり、これを引用する『太平御覧』の成立は『晋書』より新しい。

いま『呉時外国伝』によって説話を紹介すると次のようになる。

扶南の先祖は女性を王としていて、名前は柳葉といった。摸跖国の人で混填というものがいて、神に仕えることを好み、一心に怠ることがなかった。混填の至意に動かされた神は夢の中に現れて弓を一張りを与え、商船に乗って海に出るよう教えた。朝目覚めた混填が廟に入ると、神樹の下で弓を手に入れた。そこで大船に乗って海に出た。神は風を廻して扶南に差し向けた。柳葉はこの船を奪い取る

## 混填と蘇物

うとした。混填が神弓をとって射ると、矢は船を貫いた。柳葉はおそれて降伏した。混填はこうして扶南に至った。

第一に検討すべきは混填の出身地である。『呉時外国伝』は摸跖国としているが、『南斉書』は激国とし、『梁書』は「其の南に徼国があって」とし、『晋書』は単に「外国」とする。『南斉書』の激国はおそらく徼国の誤字であろう。徼国とは外国という意味であり、『晋書』と同じく位置を特定する手がかりにならない。ただし『梁書』ではその位置が扶南の南とされているのが注目される。

かくして、混填の出身地として固有名詞を述べているのは『呉時外国伝』の摸跖国のみである。この名は他に見えないのだが、同じ『呉時外国伝』（『太平御覧』巻787所引）に記される「横跖国、在優鉞之東南、城郭饒樂、不及優鉞也」の横跖と同じと解する見解がある（跖を跖に作る版本もある）。摸跖と横跖の一方を他方の誤字とみなすのである。この記事中の優鉞についてはやはり『呉時外国伝』（『太平御覧』巻787所引）に「優鉞国者、在天竺之東南可五千里、国土熾盛、城郭・珍玩・謡俗、与天竺同」とある。

杉本は摸跖と横跖の関係について、一方を他方の誤字とみるのではなく、両方とも、『水経注』巻1所引康泰『扶南伝』（史料7）にみえる擔秩の誤記とみる解釈を示している。擔秩国はガンジス河口のタームラリプティに比定される。すなわち杉本は、ペリオが横跖をマレー半島あるいはスマトラに位置比定するのを批判して、摸跖国とは擔秩国つまりタームラリプティであると主張しているのである [杉本 1956: 339]。これは一つの可能性を示してはいるが、同じ康泰の書物に見える字形のよく似た名辞という以上の根拠があるわけではなく、摸跖国をインドに求めようとする発想にでるものと思われる。

横跖についても優鉞についても上に引用した以上の手がかりはない。優鉞は明らかにインド文化圏に属するが、その位置は天竺の東南五千里とい

うことでインド（あるいはその中心部）からかなりはなれたところである。横跌はそのさらに東南に位置し、上引の記事からはインド文化圏に属するかどうか不明であり、やはりマレー半島あるいはスマトラに位置比定するのが自然な解釈に思われる。これは『梁書』が混填の出身地を扶南の南の外国としているのとも符合する。ただし、『梁書』のこの部分が何を根拠にしているのか不明である。また摸跣国と横跌国を同定する根拠は、上記の擔秩国と同定する説と同様で、同じ『呉時外国伝』に見える字形のよく似た名辞というだけである。

かくして混填の出身地をインドに求めるのは一つの可能性に過ぎず、むしろ『梁書』に従って扶南の南方に求めるべき可能性の方が強いように思われる。とすれば、扶南の建国はインドとの関係によるのではなく、東南アジア内部の諸関係の中からなしとげられた国家形成であったことになる。

生田がすでに『梁書』の記事を紹介して、混填の出身地を扶南の南方おそらくマレー半島とする見解を提起している。生田はさらにその根拠として貫頭衣を挙げる。すなわち『梁書』（および『南齊書』）によれば、混填が伝えた文化の象徴として貫頭衣がのべられているが、貫頭衣は『後漢書』南蛮伝で東南アジア固有の文化の象徴とされている [生田 1984: 168]。すなわち交趾の元来の風俗を記す部分に「以布貫頭而著之」とある。さらに生田は取り上げていないが、『漢書』地理志粵地の条は海南島の風俗として「民皆服布如単被，穿中央為貫頭」と記している。

生田はまた、東カリマンタンのクタイ碑文に見えるクンドゥンガという名前を、混填と非常に近い発音をもつと指摘している。字体から4世紀末ないし5世紀初めと推定されるクタイ碑文によれば、この碑文を発したムーラヴァルマン王の祖父の名前がクンドゥンガ Kuṇḍungga であり、これを生田は「インドネシア系とおぼしい人名」と考えている。クロムはクンドゥンガは残念ながらインドのものともインドネシアのものとも判定でき

## 混填と蘇物

ないとしつつも、よく似たインドネシアの名前としてクドゥン Kuṇḍung を指摘している [Krom 1931: 73。クロム 1985: 18 参照]。クロム自身は混填の原音を問題にしているのではないし、生田もまたおそらくクドゥンガを混填の原音と主張しているのではないのだが、いずれにせよ、混填に近い発音の東南アジア現地の（南島語系の）人名があるのである。

混填の原音について杉本は通説のカウンディンヤではなくクンディナ Kuṇḍina とする説を出しているが、いずれもサンスクリットである。クロムによれば、クドゥクラー Kuṇḍukūra という名前がパツラヴァ刻文に見えるということなので、これも候補たりうるであろう。しかしながら、これらインドの名前で解釈するのは、混填がインドの出身であることを前提にするものであって、混填がインド出身であることの根拠でありえないことはもちろんである。

混填をバラモンとみなすのは史料自体には書かれていない、後世の学者の解釈である。たしかに「好事神，一心不懈」（『呉時外国伝』）、「事鬼神者」（『梁書』）などと表現されているので、ある種の宗教者であり、バラモンとみなすのに一定の根拠があるといえよう。しかしこの説の主な根拠は混填の原音をカウンディンヤとする想定にある。つまり、『梁書』扶南伝によれば4世紀後半の扶南王に、もとはインドのバラモン（天竺婆羅門）であった橋陳如というものがいたことが記されていて、この橋陳如の原音がカウンディンヤとされている。したがって、混填の原音がカウンディンヤであると仮定すれば、混填はバラモンの可能性があるというにすぎない。

以上を要するに、混填をインド出身とみるべき根拠はけっして強いものではなく、扶南の南（たとえばマレー半島）の出身とする説に分があるというべきであろう。とすれば、扶南の国家形成は、生田も指摘するように、インド文明の到来以前における、東南アジア内部のできごとの結果だったというべきである。

## 2. 蘇物の天竺往来

扶南の国家形成がインド文明の到来に先立っていたことを示す根拠として、扶南の王族である蘇物という人物のインド往来をあげることができる。すなわち、『梁書』巻54中天竺国伝および康泰『扶南伝』（『水経注』巻1所引、『扶南伝』は『扶南土俗』のこと）（史料5～7）に概略以下のような、扶南の王族の蘇物なる人物が天竺つまりインドを往復した話が伝えられている。なお、これら史料の相互関係を勘案するに、『梁書』のこの部分は康泰の『扶南土俗』（および『呉時外国伝』）に依拠していると想像される。

罽国の家翔梨という者が天竺を経て転々と交易をしながら扶南に流れてきた。扶南王の范旃は天竺の話に興味をもち、一族の蘇物という者を派遣した。扶南を発した蘇物は投拘利（または拘利）から西北の方向に大きな湾に乗り出して、湾岸の数国を経て、一年余りかかってガンジス河口の擔秩に至り、河をさかのぼって天竺の都に至った。天竺の王はきわめて遠い海の向こうからの訪客におおいに驚き、国内を見学させ、月氏の馬4頭を范旃への贈り物として、陳、宋という2人の返礼の使者を派遣した。先に范旃に問われて家翔梨は3年で往復できると言ったが、蘇物は実際には4年かかってようやく帰国した。ちょうどそのとき扶南にきていた康泰は、陳、宋の2人から天竺の様子を詳しく聞くことができた。

康泰が扶南に使いしたのは225～230年ころなので、蘇物のインド往還は220年代のことである。

投拘利または拘利の位置については、これをタクアパーに比定する説の当否はともかく、マレー半島の中部か北部であることは間違いなからう。ここから蘇物はベンガル湾の北辺をたどり、1年余りかけてガンジスの河

## 混 填 と 蘇 物

口に到着しているという。河口の町擔秩は、後代の法頭の多摩梨帝や義浄の耽摩立底と同じタームラリプティとする通説に従っておいて大過ないであろう。ここでいう天竺の都は明らかでないがガンジス中流域の交通、経済また美術の中心地マトゥラーかもしれない。

この話は我々には二つの意味で重要である。

第一に、扶南と中天竺の関係がそれまできわめて希薄だったことがわかる。史料6で家翔梨が范旃に天竺のようすをさまざまに語っているのは、范旃にとってそれが珍しい話だからであろう。そして范旃は、今から行けばいつ帰って来れるかと問うているのは、インドがどれほど遠いか知らないからである。家翔梨は3年で往復できると答えたが、実際に蘇物が行ってみると4年かかったというのは、インドと扶南の間の往來が常態ではないことを示している。また史料5では、蘇物を迎えたインドの王が遠來の客におおいに驚き歓待している。

かくして、この3世紀初めにおいて扶南が東南アジアにおけるネットワークの中心に発展している（だからこそ朱応、康泰が扶南に行った）のは、インドや中国との関係によるのでないことがわかる。すなわち扶南の国家形成は、具体的な事情や背景は不明だが、東南アジア域内の諸関係の産物ということになる。

第二に、マレー半島中部または北部からガンジス河口へとベンガル湾を渡るのに湾岸を歩き1年余りかかっている。つまりモンスーンによって1カ月あるいは2カ月ほどでベンガル湾を乗り切るモンスーン航海は行われていないと考えられる。モンスーン航海が確立していれば1年で往復可能なはずである。また、第1点のようなインドとの関係が疎遠な状況は、モンスーン航海が確立していないことを意味していよう。つまりモンスーン航海が確立していれば、これほど疎遠ではないはずである。

康泰の『呉時外国伝』（史料8）には扶南の船に関する記述があり、大

船は100人をのせるというのが、長短の櫂や棹で進むものとされている。蘇物の天竺往来に用いられたのはこのような大船であったかと想像されるが、帆を備えているようすがないのはモンスーン航海がおこなわれていないことを意味していよう。

ついでながら、康泰がモンスーンやモンスーン航海についての知識を持っていたことは彼の『呉時外国伝』（史料9）から明らかである。この史料に言う「時風」はモンスーンのことであろう。7帆を張る大船が迦那調洲から1カ月あまりの「時風」で大秦国に至るといふ。迦那調洲の位置比定は困難だが、大秦国はローマ帝国のこと、正確にはその東方属領のことであろうから、この記事はアラビア海の事情を伝聞で記していることになる。アラビア海では1世紀にはモンスーン航海が普及していたことは有名な『エリュトゥラー海案内記』などから明らかである〔薮1999〕。

## お わ り に

扶南建国説話の主人公混填がインド出身であるとの説を否定しざることには難しいとしても、その出身地を東南アジアとみる説の蓋然性が高いといふことができる。また蘇物のインド往来のありさまによって、3世紀はじめころの扶南はインドとの関係が希薄であったことがわかる。とすれば、扶南という東南アジアにおける初期国家の形成、およびこれが3世紀当時東南アジア交易ネットワークの中心に位置したことは、インドの直接的な影響によるのではなく、東南アジア自体における何らかの動きの結果によるものと考えらるべきである。すなわちインド文明との接触の結果として東南アジアに国家が形成されたという意味での「インド化」論は根拠をもたないのである。

## 混 填 と 蘇 物

### 追記

本稿は科学研究費補助金を受けた共同研究の成果報告書に発表した次の論文に加筆訂正をほどこしたものである。深見純生「混填と蘇物——扶南建国説話の再検討」肥塚隆編『東南アジア彫刻史における〈インド化〉の再検討 論文編』平成14年度～平成16年度科学研究費補助金〔基盤研究(A)(1)〕研究成果報告書、大阪大学総合学術博物館、2005年3月、5-9頁。

### 引 用 文 献

- 生田滋 1984「国家の形成と高文化」大林太良編『東南アジアの民族と歴史』山川出版社 161-250
- 石澤良昭・生田滋 1998『東南アジアの伝統と発展』中央公論社
- クロム, N. J. 著 有吉巖編訳 1985『インドネシア古代史』道友社
- 杉本直治郎 1956「インドシナ古代社会の史的性格——とくに扶南の場合」同『東南アジア史研究 I』巖南堂 308-416
- 薮勇造 1999「インド諸港と東西貿易」『岩波講座世界歴史 6』岩波書店 133-156
- セデス, G. 著 辛島昇・桜井由躬雄・内田晶子訳 1980『インドシナ文明史』第二版 みすず書房
- 山形眞理子・桃木至朗 2001「林邑と環王」『岩波講座東南アジア史 1』岩波書店 227-254
- Krom, N. J. 1931 *Hindoe-Javaansche Geschiedenis*, tweede herziene druk, 's-Gravenhage.

### 史 料

史料1 康泰『呉時外国伝』（『太平御覧』卷347所引）

扶南之先，女人為王，名柳葉。有摸跌国人字混慎，好事神，一心不懈。神感至意，夜夢人賜神弓一張，教載買人舶入海。混慎晨入廟，於神樹下得弓，便載大船入海。神廻風令至扶南。柳葉欲劫取之。混慎拳神弓而射焉，貫船通度。柳葉懼伏，混慎因至扶南。

注＝4回の混填のうち最初は混慎，他の3回は混慎。すべて混填の誤記と考えられている。

史料 2 『南齊書』卷58扶南国伝

扶南国在日南之南，大海西蠻中，広袤三千余里。有大江水西流入海。其先有女人為王，名柳葉。又有激國人混填，夢神賜弓二張，教乘舶入海。混填晨起，於神廟樹下得弓，即乘舶向扶南。柳葉見舶，率衆欲禦之，混填拳弓遙射，貫船一面，通中人，柳葉怖遂降。混填娶以為妻。惡其裸露形体，乃置布貫其首。遂治其國，子孫相伝。〔後略〕

史料 3 『梁書』卷54扶南国伝

扶南国俗本裸體，身被髮，不制衣裝。以女人為王，号曰柳葉，年少壯健，有似男子。其南有徼國，有事鬼神者，字混填。夢神賜之弓，乘賈人舶入海。混填晨起，即詣廟，於神樹下得弓。便依夢乘船入海，遂入扶南外邑。柳葉人衆見舶至，欲取之。混填即張弓射其舶，穿度一面，矢及侍者。柳葉大懼，舉衆降混填。混填乃教柳葉穿布貫頭，形不復露。遂治其國，納柳葉為妻，生子分王七邑。其後王混盤況，以詐力間諸邑，令相疑阻，因舉兵攻併之。

史料 4 『晉書』卷97扶南国伝

扶南西去林邑三千余里，在海中大灣中，其境広袤三千里。有城邑宮室。人皆醜黑，拳髮裸身，跣行。性質直，不為寇盜。以耕種為務，一歲種，三歲穫。又好雕文刻縷。食器多以銀為之。貢賦以金銀珠香。亦有書記府庫，文字有類於胡。喪葬婚姻略同林邑。其王本是女子字葉柳。時有外國人混潰者，先事神，夢神賜之弓，又教載舶入海。混潰且詣神祠得弓，遂隨賈人泛海至扶南外邑。葉柳率衆禦之，混潰拳弓，葉柳懼，遂降之。於是混潰納以為妻，而據其國。後胤衰微，子孫不紹，其將范尋復世王扶南矣。〔後略〕

史料 5 『梁書』卷54中天竺國伝

〔前略〕魏晉世絶不復通，唯吳時，扶南王范旆，遣親人蘇物使其國。從扶南發，投拘利口，循海大灣中，正西北入，歷灣辺數國，可一年余，到天竺江口，逆水行七千里，乃至焉。天竺王驚曰，海濱極遠，猶有此人，即呼令觀視國內，仍差陳宋等二人，以月氏馬四匹報旆，遣物等還，積四年方至。其時吳遣中郎康泰使扶南，及見陳宋等，具問天竺土俗，云仏道所興國也。〔後略〕

## 混 填 と 蘇 物

史料6 康泰『扶南伝』（『水経注』卷1所引。『扶南伝』は『扶南土俗』のこと）

昔范旃時，有潭楊国人家翔梨，嘗從其本国到天竺，展轉流賈至扶南，為旃說天竺土俗，道法流通，金宝委積，山川饒沃，姿其所欲，左右大国世尊重之。旃問之，今去何時可到，幾時可廻。梨言，天竺去此可三万余里，往還可三年，踰及行，四年方返，以為天地之中也。

史料7 康泰『扶南伝』（『水経注』卷1所引。『扶南伝』は『扶南土俗』のこと）

發拘利口，入大湾中，正西北入，可一年余，得天竺江口，名恒水。江口有国号擔秩，属天竺，遣黄門字興為擔秩王。

史料8 康泰『吳時外国伝』（『太平御覧』卷769所収）

扶南国伐木為船，長者十二尋，広六尺，頭尾似魚，皆以鉄鑷露裝，大者載百人，有長短橈及撐各一，從頭至尾約有五十人或四十余人隨船大小，行則用長橈，坐則用短橈，水浅乃用篙，皆撐上応声如一。

史料9 康泰『吳時外国伝』（『太平御覧』卷771所引）

從迦那調洲，乘大舶，張七帆，時風一月余日，乃入大秦国。

## Hundian (混填) and Suwu (蘇物)

### —A Reexamination of the Formation of Funan (扶南)—

FUKAMI Sumio

Although it is difficult to reject emphatically the theory that Hundian, the legendary founder of Funan, came originally from India, the probability seems higher that he was of Southeast Asian origin. The itinerary of Suwu, a member of the royal family of Funan, to and from India in the early third century CE demonstrates the unfamiliarity between the two countries. In which case, the founding of Funan, the earliest known case of state formation in Southeast Asia, assumed to have taken place around the first century CE, and also its development into the center of the Southeast Asian trade network in the third century, must have been a result not of Indian influence but of developments taking place in Southeast Asia itself. The “Indianization” theory, in the sense that state formation in Southeast Asia took place after its contact with Indian civilization, thereby loses credibility.